

アノミーによる暴力性の高揚と排外意識の研究

——社会調査データの計量分析を通じて——

東北大学大学院 下窪拓也

1 目的

本報告の目的は、排外意識を一種の暴力性にとらえ、その発現メカニズム解明に向けた研究の成果を議論することである。暴力性の規定要因としてはこれまでアノミー論が議論されてきた。また、暴力性はその方向性に影響を与える潮流が存在し、必ずしも暴力性が外集団に向かって（外向きに）生じるとは限らず、自殺のように自己に暴力性が向かう場合もある。従って、暴力性が外に向く傾向にある社会において、アノミーに陥った人が排外意識を強く抱くと考えられる。本研究では、個人が認識する「規範の喪失」をアノミーの指標として扱う。また、外に向く暴力性として殺人率を、内に向く暴力性の指標として自殺率を用いて社会における暴力性の潮流の指標とする。そして、これらの変数の相互作用が排外意識に及ぼす影響について分析していく。

2 方法

そこで、本分析ではヨーロッパ各国で行われた国際社会調査 European Social Survey Round5 の二次データを用いたマルチレベル分析を行う。この調査では、移民に対する人々の態度に関する質問が含まれており、本研究では、移民に対する意識を排外意識として扱う。この排外意識を従属変数とするが、排外意識と一口にいても、その内容は一枚岩とは言えない。そこで本研究では、移民に対するネガティブな意識としての反移民意識と、移民を自国への脅威であると認識することで抱く排外的意識としての脅威認知を排外意識として分析を行う。次に、独立変数に、個人のレベルには規範の喪失、国のレベルでは殺人率と自殺率を扱う。そして、統制変数として回答者の年齢、性別、主観的経済状況、生活への不満、就労状況、各国の GDP、移民人口率、失業率、を用いて分析を行った。

3 結果

分析の結果、反移民意識と脅威認知の両方に対して、外向きの暴力性と規範の喪失の交互作用項が、有意に正の影響を持つことが確認された。このことから、外向きの暴力性が大きい社会ほど、また、外に向かう暴力性の割合が大きい社会ほど、規範を失った人々は排外意識を強める傾向にあると言える。次に、脅威認知に対してのみ、単体での規範の喪失と自殺率と規範の喪失との交互作用項が有意に負の効果を持っていることが示された。まず規範の喪失についてだが、従来の規範に対して否定的な人は、ある種の反権威主義的なパーソナリティをもち、異質な存在である移民に対しても脅威を認知しない傾向にあることが考えられる。次に、自殺率との交互作用項については、内に向かう暴力性が強い社会ほど、外部に向かう暴力性である排外意識は抑制される傾向にあると解釈出来るが、なぜ脅威認知にのみこの作用が働くのか、今後さらに詳細な検証が必要となる。

4 結論

以上から、アノミーによって生じる暴力性が、その社会における暴力性の潮流との相互作用により排外意識に影響にすることが明らかとなった。今後の課題として、アノミー、暴力性および排外意識の、明確な因果関係を追求していくため、時系列を考慮した分析を行っていく必要がある。